

文化財資料

掛川城天守石垣調査報告書

掛川市教育委員会

## 凡例

- 一、本書は昭和五一年六月九日から三十日にわたって実施した掛川城天守閣東側の石垣の緊急調査報告である。
- 二、調査は掛川市教育委員会社会教育課が実施した。
- 三、調査参加者は次のとおりである。  
鈴木繁、立石弘、清水功、中山礼行、  
松井孝、永井啓視、佐藤益男、横山哲夫、  
山崎堤一、松下信夫、内藤次郎、岩井克允
- 四、執筆は立石弘が担当した。
- 五、掲載した写真は、石垣の外は岩井克允が撮影したものである。
- 六、実測図は内藤次郎、岩井克允が行ない、清書は岩井克允が行なった。

## 目次

調査報告刊行にあたって	6
第一節 名称	
第二節 位置	
第三節 発見の端緒	
第四節 実施踏査を基定とした自然概況と石積みについての考究	8
(1) 城郭周辺の自然概況	
(2) 石積みについての考究	
(a) 石垣の成因と構石について	
(b) 築石工法について	

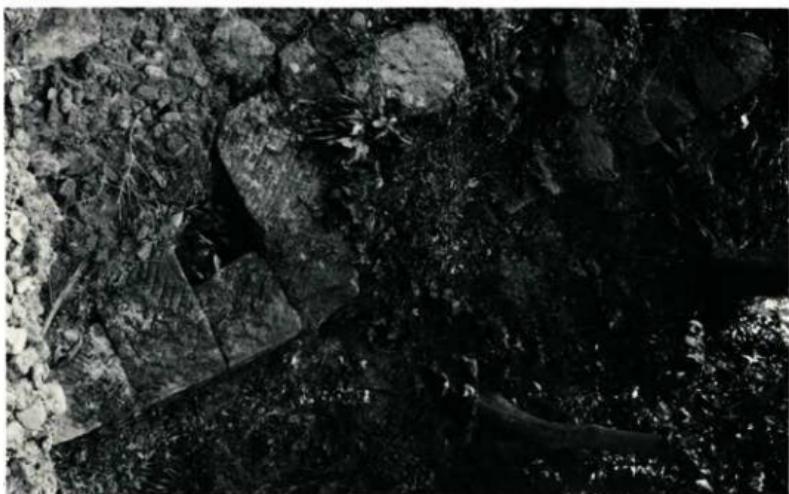
## 図版目次

図版一、(+) 嘉永七年の大地震による掛川城被害絵	2
(+) 嘉永七年の大地震による掛川城被害絵	2
(+) 天守北東隅部の石垣崩落状態(東から)	2
(+) 石垣(東南隅部)	3
(+) 石垣(中央部)	3
図版三、出土した瓦(一)	4
図版四、出土した瓦(二)	4
城外	5

## 参考資料

荻生徂来の鉛録	11
金沢城郭資料	

天守北東隅部の石垣崩落状態（東から）



「安政大地震にて御三丸城郭圖」の天守の部分（矢印の部分が倒れられた）



一 漢図



(一) 石垣(東南隅部)



(二) 石垣(中央部)



(四) 三ッ鱗・北条出羽守氏重



(一) 左三ッ巴・朝比奈備中守泰杰泰朝



(五) 九曜星・松平大膳亮忠重  
松平遠江守忠商



(二) 三ッ葵・松平總岐守定勝  
松平越中守定綱



(六) 太田桔梗・太田備中守資後~資美

出土した瓦(一)鐵瓦



(七) 枝菊・青山大藏少輔幸成



(一) 男瓦



(一) 鱗尾部片



(四) 男瓦



(二) 右三ッ巴・朝比奈備中守?



(六) 唐草文字瓦



(七) 均正菊花文字瓦

出土した瓦(二)鱗外



(三) 三ッ鱗文鬼瓦片

## 『調査報告刊行にあたつて』

今回、「掛川城天守石垣調査報告書」が発刊されることは、郷土の歴史研究、とりわけ城跡研究にとって極めて意義があり誠に喜びにたえません。

このたび、掛川城の天守閣崩土防止工事中、天守閣に積まれた石垣が一二〇余年ぶりに発見されました。

掛川城の築城の年記は祥らかではないが、今から凡そ五百年程前、今川義忠の臣、朝比奈泰燃の築城とされております。朝比奈氏三代、石川氏二代と引継がれ、その後天正十八年近江長浜から入封した一豈が城下町の改造を行い、城の強化をはかり新しい時代の様式を加え、近世城郭の基盤の整備がなされたのであります。以後松平定綱により元和五年から同七年にかけ三層の天守閣が築かれました。

今回発見の端緒となつた石垣は安政の地震により崩壊し、覆土されて埋もれたまゝになっていたものであり、石垣は山内一豊築城時のものか松平定綱の天守再建時のものかは、今後の研究につはかはないが、いずれにしても貴重な資料であり、又同時に発掘された歴代城主の家紋瓦の発見も今後の歴史研究に貴重なものと言わざるをえません。

このたび発刊のこの報告書がこれから掛川城研究資料となれば望外の喜びであります。

昭和五三年三月吉日

掛川市教育長

佐藤正夫

## 第一節 名 称

本城址の名称について

掛川誌(掛川誌稿)、掛川市誌によれば、別称を雲霧城、辰多山城、松尾城等と呼び、それぞれの記録とも明確な意味を述べて山号寺号の意で辰多山と呼称したのではないかと推考する。松尾城については、掛川古駅について延喜式に載するところ佐野郡横尾駅とあり、「横尾は松尾の誤りならん」と市誌にあるところから見れば宿駅名からその名を探つたのである。

雲霧城は、「遠江古跡図鑑」によると本丸入口虎口の備えとして三日月堀があり霧の説をこの堀より湧出したものと記している。一説によれば敵の攻撃に際し、霧吹戸から湧き出した霧が天守を覆い隠したもの伝えられたところからその名が冠せられたのである。

## 第二節 位 置

物を信州に送る塙街道としての主要街道である軍用道路として、戦国の世に幾多の軍勢が往来した信州街道が交叉する交通の要所にあり、東遠地方の経営の拠点として大井川から天竜川までのエリヤの中心的要の城地として位置していた。

掛川城は、掛川市街地の中心に位置し、海拔五六・六米の竜頭山の丘陵地にあり、本丸山を中心として構築された平山城で、自然の地形から自ずと縄張りも定まり、孤山の本丸山の最高所に天守を、南側の山腹を削平して本丸を現在の御殿の地を二の丸に、現市役所の地を三の丸と配した。各曲輪は土塁と水濠で区割りし、東に山下郭、北に竹の丸、東北に現掛一小の子(北)の方角の角に「子角山」があり古城がある。南に松尾郭、東南に川を隔てて大手郭を配し、城山の西には中の丸・内郭と中西の堀の外に中西、大西の侍町が、東には仁藤門があり、侍町が抜がつていた。逆川の南は城下の町屋が続き、町は掛川の宿場町として東海道五十三次の二十六番目の駅次の宿で街道道中の要所として城と町は結構の濠で囲まれ近世城郭都市を形成していた。

## 第三節 発見の端緒

掛川城址の所在地は掛川市掛川一一四二番地の一にあって、東遠江の中央に位置し、主要幹線の東海道と駿河湾、相良湊より秋葉山を経て北遠、信州に至る秋葉街道、また塩を主体とする海産工事をする矢先、土砂防止工事現場で掘り出され、野面積みの大

昭和五二年五月十四日掛川公園整備事業の一環として、平和観音像のある天守閣跡東側の山腹が土砂崩れの心配があり、石積み工事をする矢先、土砂防止工事現場で掘り出され、野面積みの大

石が一部分露出したと工事施行業者及び監督者よりそれぞれ連絡をうけた。

発見された石垣は安政大地震(マグニチウド八・四)により天守閣も惜しくも倒壊し、同時に石垣の一部も崩落し上部からの崩土で覆われてしまい、その上に雜木が生い繁って全く石垣の姿は認められていなかつた。

わずかに郷土史家の一部の人人が天守台、東北の棱線部の石垣が一部分露出していたことを認めていたにすぎず、ほとんどの市民の人達は、その存在することを肯定し得なかつたと云つても過言ではない。

かくして百二十三年ぶりに永い眠りから覚めた石垣も土中に永く埋れていたため水分を多く含み、石そのものが脆くなり表出した部分が太陽に当ると剝離していくような状態であり、そのまま、その状態保存の可能性は困難と思料されるものであつた。

#### 第四節 実施踏査を基定とした自然概況 と石積みについての考究

##### (1) 城郭周辺の自然概況

掛川城の天守閣が竜頭山という丘陵の高台に立地するのは、領主として権威の象徴を示すものであり、眼下に流れる逆川の水利と、広大な沖積低地の土地生産(年貢)関係に基づくものと推察さ

れる。

城趾付近の標高は五六・六米、低地の標高は一五米～三〇米であり、その差は最大三〇メートル程度である。

戦国末期の城郭構造の立地選定については、城の攻防をめぐる申すまでもないが、地形と城下町の変遷に、掛川城が日本六ヶ所名城の一つにまで数え上げられるまでに至つたのも、平山城としてその立地景観上からいって地形的に恵まれていたためであろう。

(日本六ヶ所名城は大阪城、姫路城、熊本城、掛川城、名古屋城江戸城である。)

##### (2) 石積みについての考究

###### (1) 石垣の成因と構石について

「人類は石なくして今日の文明を築き得なかつた」とある歴史学者が語っているように、掛川の人類文化を支えてきた底辺の力は、まさにその頑丈な支えとなつた築石にあると言つても過言ではない。

築石にあたつて終始心を労したのは、石の収集と活用だったであろう。

市内上西郷内山石材店の内山輝男氏の話によれば、いずれも、市内より産出した石を用いている。その殆んどが日坂石、伊達方

石である。東北部の棱線に露出していた石は、栗本地区の宝谷あたりの産である。石質としては原泉周辺の石の方が材質的にも良質であるが、当時の交通上からはその搬出が困難であつたが為に、見当らない。

日坂石、伊達方石等はその成性から云つて硬度は、低いもので未だ本当の石というまでには到つていかない水成岩である。

「」の名前は、昔からその産出するところの地名を用いて呼んでいる。

日坂石の産出場所は、日坂八幡様のすぐ東から旧東海道沿いに日坂本町へ入る手前を左にとった山から採つたもので、伊達方石は、塩井川原周辺で採石したものと思われる。

そのほかには、五明の奥の石、あるいは、上垂木の山中辺りの石も散見するが、これ等はいずれも転石を椎石（切石）として運ばれたものである。

石垣の裏側には、裏込石（<sup>うこいせき</sup>）がぎっしりと自然の山肌と石垣との間に積み込まれている。

この栗石は雨水を通水するためのもので、その多くは小笠山山麓周辺で拾集したものと、青く光る篠場の石や、赤い長谷辺の石も散見するが、形状も殆んど同じで、それこそこれだけ膨大な量の粒の揃つた石ころを集めには、民族共通の地盤が、「縁の下の力持ち」として、藩民多数の中にうづくまつていなければ達成

出来なかつたであろう。いまの掛川の文化をいろいろとっているものには、物言わぬ庶民の間から咲き出た「石の花」が息づいていることを忘れてはいけないとしみじみ思う。

#### （四）築石工法について

用材方式として「野石積み」と「椎石積み」があり、「野石」は山野に転んでいる自然石のことと「天石」ともいうが、掛川城の場合には「椎石」である。

「椎石」は野石に対して岩盤もしくは岩塊としてある自然石を大割小割にしたものの大詰である。

石は「布石」（切石でその長方体のものを呼ぶ）である。その石積は、乱層積みである。石積には整層積みと乱層積みがあり、整層積みは上石下石間の横目地を一直線に通す式に積みを重ねていくもので、乱層積みは、合場の凹凸は凡そ石格好にまかせながら「積み」の凹部へ凹部へと石の凸部（鼻部）を落しかけてゆく工法である。

乱層積みは、あつらえ向きにはしつらえられないから、その据え方にはいちいち工夫と手間を要し、乱層積みは整層積みよりも何倍かの困難さが伴つたことは当然である。

それにもかかわらず乱層積みが整層積みより断然多く用いられたのは、乱層積みのモザイクな視覚的効果が天守の美しさを一層、ひき立たせるに役立つたからでもある。

掛川城の石垣は「乱層椎石積み」であり、中心の石を六箇の石でとりまく工法で、乱積である。

役石がどんなに利いても石積みのコンビネーションがどんなに精巧であってもそれらを大きく支えているものは「根石」である。

この掛川城の東南面の根石はやはり塙井川原石であろうか。横一米五〇粂、高さ七〇粂、巾六〇粂の直方体であり、腰曲から深さ一米二〇粂に据えられ、根石の量感としてはそれほどの大きさでもなく城石の根石としては、本城石面の大きさから云つて適當な大きさであろう。

しかしながら、こんなにも大きな「根石」が一体どうして運ばれたのであるか。最近の奈良県で出土した修羅の如きものであろうか。

それらを証する記述は全くない、推測するしかない。

石引き、石寄せの技術は、前述の修羅の如く八世紀ごろから発達して来たが、大名のブレーンたちが、じきじき発明したもののように考へる。

掛川城東南面の稜線の「根石」部つまり基底石は岩盤の上に水平に据えられていた。この「根石」と「工面」には細心の注意が払われ、床ざさえも根代に泥土や砂砾もなく取り扱われ、「固地」の岩盤に「地掘り」を行いそれにしつかりと組み込まれており、石垣がずれないよう「組」により少し小さめな栗石がそこにぎっしりと組込まれていた。

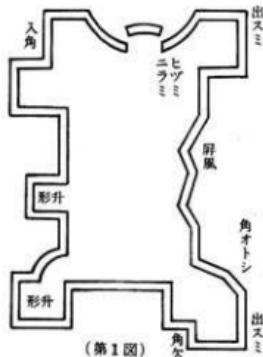
石垣の勾配は三分の照勾配（一メートルで三十三粂寝る）である。このような岩盤の上に立った石垣があるので石垣が沈下することはない。しかし安政元年の大地震によって天守のすぐ下の上層部の石垣が何故崩れたのだろうか。

これは天守の建物の上方からの直圧力が石垣上部にもろに働いたためであろうか、とも考へられる。

石垣は、腰曲地面より一メートル地下にもぐつておらず、腰曲地面より上部はその石面の表面の凹凸をノミで削平させて忍者等が容易に登れないように加工がしてあった。

近世の城郭の石垣は、技術的に見てもなかなか優れている。もとより人力や費用を惜しまない仕事であるから、今日のよう経済的にしばられた石垣と比較することは妥当ではないかも知れないが、多年の経験を骨子とした当時の石積法には今日の技術も及ばない細心の工夫がめぐらされていることに敬畏と驚嘆を覚えた。

また石垣の裏側につめられた栗石は石負子によつて運ばれたと思ふ。



(第1回)

鈴  
錄第十六

荻生徂来の鈴銘第十六城制下に謙信流、北条流の石橋の分類が説かれており<sup>(Page11の)秘伝書</sup>〔P14〕山目打込積之絵圖他四頁については「金沢城郭史料」から刷ったものです。この資料は、立石弘氏が芝浦工業大学教授・萩原一義氏より提供頼つたものです。

物茂卿著

城  
制  
下

曲折ハ横矢ナリ。謙信流ニ、ヤマト繩ト云習アリ。  
出角ハ横矢弱ケレドモ、櫓ヲ付レバ横矢キクナリ。  
入角ハ矢倉ヲ付テ、出張過ル處ハ

入角ニスルナリ。

城池

ヒツメテ取ベシト。山鹿流ニ崩折ハ強宜シカラズ、百間モ二百間  
モ一文字ニ取出タル邦ニ用ユ。俄ノ普請ニハ土居ヲバ直ニシテ屏バカ  
リ折ルコトアリ。屏折ト云ナリ。半間ホドヅ、二折ナリ。又内折・外  
折ト云コトアリ。外へ折ルハ、ライ地内ニアリテヨシ。是ヲ味方折ト  
云。内へ折ハ内狭クナル。是ヲ破折ト云。角落シハ山城或ハ石垣高キ  
處ニハ用ヒガタシ。ヒズミハ両方ニ升形、横矢ヲ取ルトキハ相打ノ害  
アリ。故必一方ハヒツマスルナリ。又横矢鹿落シト云コトアリ。鹿  
落シヲ横矢ニ用ルコトナリ。

キトテ少シ石垣ヲ仕、中ノ土手ニ竹木ヲ植ヘ、其竹木ヲ中切ニスルガヨシ。但シ竹ヲスヂカヘニ種テ下枝ヲスカシテ置クトキハ矢ノ妨ナラズ。高石垣ハ却テ不堅固ナリト知ベシ。ヒヅミハ双方ナレバニラミ（第1図）。北条流ニ角落ト云ハ、入角ヲウロコガタニ突出スモ出角ヲ缺ムモ云ト。横矢順逆トハ右ヲ順ト云、直ニスベシ。左ヲ逆ト云、

一、異國ノ書ニ城ト云ハ土居ナリ。城身トモ云。池ト云ハ堀ナリ。塹

トハ、橋台ノコトナリ。橋台へ外へ出張ルトキハ横矢ギク。水タ、キヲ石ニシテ其上ヲ土手ニ仕上ニ、ハチマ一、謙信流堀ハマ、大城ハ本丸廿二間半、二・三ノ丸ハ廿七間半、總河ハ九十九間半ナリ。中城ハ本丸五十五間、二・三ノ丸廿間、總河十二間ナリ。小城ハ本丸十二間半、二・三ノ丸九十七間半、總河九間半ナリ。堀ノ深サ大城ハ三間半、中城ハ二間半、小城ハ二間ナリ。此土ヲ以テ土居敷相応ニナル。但シ地ノ高卑ニヨルベシ。總河ノ堀井ニカラ堀ハ片ヤゲンナリ。手前ヲ深クスル、狹キ故ナリ。ツマヲリハ横曲輪ニ用

ユ。其外ハ皆ツマシラズナリ。ツマ折トハ曲輪ノナリニ隨て掘ルコトナリ。

〔如レ此〕ツマシラズトハ〔如レ此〕スルコトナリ。水戸

進ハ不淨ヲ防グ為ナリ。外曲輪ノ堀ノ内、曲輪へ統ク處ヲバ土居ニテ

仕切テ土橋ニスルヲ云ナリ。土橋ニナラヌ處ヲバ板橋ニシテ、下ヲ土

居ニテ細ク仕切ル。内ヲ用水ニ用ルナリ。又山城ニハ堅堀ト云コトア

リ。山城ハクルワアサマナルモノナルユヘ、是ヲ用ヒテ敵ノ勢ヒヲ分

ツ。山鹿流ニモ同事ナリ。北条流ニ内堀・外堀ト云コトアリ。内堀ト

ハ山城ナドニ屏ノ内ニ内虎落ノ替リニ堀ヲホル。腰郭ノ内ニモ掘テ利

多シト云ヘリ。外堀ハ城ノ方ノ土居水際ハカウバイニシ、水叩キハ切

立タルヨシ。又カラ堀ハ道ニナル益アリ。又敷取トテ堀向ニ雁木ヲス

ルヲ云。横矢ナキ處ニスベシ。其向ノ屏ニ切戸ヲ排ヒ置テ石火矢ヲ仕

カクヘシ。敵横矢ナキ處ナルユヘ埋草ヲ以テ寄ルヲ打ヒシグ為ナリ。

又塵防ト云ハ城ヨリ出ルニ堀ヘ落ベキ危キ處ニ土居ヲスルヲ云。高ハ

足ノ三里ダケニシテ上ハマ三尺ナリ。又不淨捨ト云ハ敵ヨリ見エヌ

様ニ入堀ヲ排置テ舟ヲ置クベシ。山鹿流ニ堀ハ古法ハ矢ガカリ十

五間トテソレヨリ広クハセズ。今ハ不然。但小口脇ナドノ堀ハ堀口

広サ十間ヲ上トシ、十五間ヲ中トシ、廿間ヲ下トス。又大將ノ居城ハ

十五間上、廿間中、廿五間下ト云ヘリ。上中下ト云ハ繩張アシキ城ニ

ハ広テモ不<sup>レ</sup>苦。繩張ヨキ城ハ堀広キハ損多シ。堀広ケレバ外ヨリ見

スキ、又横夫丈夫ナラヌナリ。堀ノホリ様、上ヘアガル際ヲ急ニホリ

付ベシ。且又堀ニハナチ置ベシ。又タマヘツキタル堀ハ深

クホルベカラズ。又マノ水浅クナルモノナリト。異國ノ法ハ太白陰経

ニハ、堀口ノ闊二丈ナレバ深一丈、底闊一丈ト云ヘリ。威南唐ガ法ニ

ハ、堀ハ土居ヨリ十步ホド外ニホリ、堀ノ内ニ羊馬城ヲ築ク。羊馬城

ハ土居ノ高一丈已下八尺以上ナリ。広クトモ二丈ニ論ベカラズ。是日

本ニナキコトナリ。タトハ<sup>レ</sup>帶曲輪ノルイナリ。城ノ土居上ヨリ放ツ

矢・鐵砲ハ近キ處ニハ用ニ立ザルユヘ、コノ羊馬城ヲ以テ矢・鐵砲ノ

キ、ヨキナリ。二重ノ要害ナルユヘ攻破リガタキナリ。コノ屏ハ疋ニ

テナリトモ、石ニテナリトモ、土ニテナリトモ、三合土ニテナリトモ

スペシ。此ヲ牛馬壇トモ云ナリ。堀ノハマ三丈五尺ヲ狹キ限トス。閑

キホドヲヨシトス。深ハ一丈五尺、二丈ナルベシ。深ホドヨキナリ。

水アレバ第一ナリ。無<sup>レ</sup>水トモ掘ハアルベシ。水深クシテ泥アリハ

更ニ妙ナリ。事ニ臨ンデハ水中ニ刺柴・竹籠・鐵錐ヲウユベシ。呂坤

ガ実政錄ニハ堀ノ深三丈、口ノ闊十丈、底ノ闊三丈ト云ヘリ。堀ノ底

二十間ニ一ツ、円井ヲホルベシ。ワタリ一丈、深一丈、是ヲ重潤ト云。

堀ノ两岸ニハ馬蘭・茅・蘆・香附・麥門冬ノルイヲ栽ベシ。土崩レザ

ルナリ。堀ノ近處ニ高阜ヲ壠ナリ。

「一、同流石垣カウハイノ<sup>レ</sup>ニ切込ハギ・打込ハギ・野ヅラ、三種アリ。

切込ハギト云ハタガネヲ以テスリ合セタルヲ云。歴ノ炬ヲ用ユ。マル

キモノヲ十二ニワリタルカウハイナリ。打込ハギトハ植ニテカドヲ打

ヒシギテツキ合セタルヲ云。是ハ十ワリトテ、マルキモノヲ十二ワリ

タルカウハイナリ。野ヅラト云ハ、アリナリノ石ニテツキタル石垣ナ

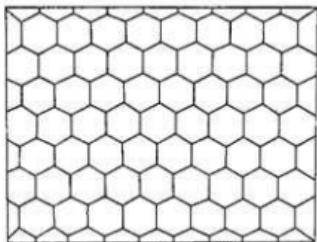
リ。是ハ八ツワリナリ。雨ヲトシト云ハ下ハカ

ウバアリテ屏下ハ直ニスルヲ云。

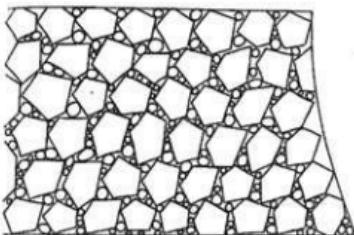


〔如レ此〕切込ハギハ四

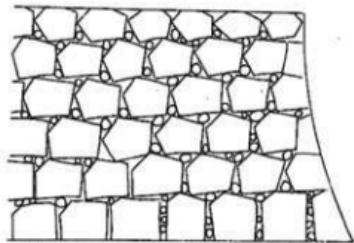
分一、打込ハギハ五分一、野ヅラハナラシトテ上一トヲリバカリヲ兩ヲトシニスルナリ。又ハダカ・鉢巻ト云コトアリ。壠ナシニ地ヨリ石壠ヲスルヲ保石壠ト云。土居ノ上ニ少シ石壠ヲスルヲ鉢巻ト云。何レモ石壠ヲ低クスルユヘ右ノカネラズトモ心得次第ニスベシ。北条流ニ石形ハ四方ナルガヨシ。丸キハアシ。<sup>アシ</sup>。扣ハ長キヲヨシトス。<sup>ヨシ</sup>栗石入様ハ石尻ヨリ長ク入ベシ。總ジテ石壠ハ石ノ品々ニ念ヲ入、ムツカシキモノナルユヘ。不<sup>レ</sup>入處ニハ無用ニスベシ。門脇ナドノノリノ広クナラヌ處ニハ石壠ヲ可<sup>レ</sup>用ト云。山鹿流ニハ石壠ハ高サ三間、内ノ數ハ六間ノ内ニテモ不<sup>レ</sup>苦、外法トモ二間<sup>一尺ニス</sup>ベシト云。愚按ズルニ石壠ハ加藤清正ノ一流アリ。彼家ノ士ニ飯田寛兵衛・三宅角左衛門ヲ兩カクト称シテ石壠ノ名人ト云シモノナリ。石壠ヲ築クニハ幕ヲ張テ一円ニ外人ニ見セズト云。今ハ町人ノワザトナリ、武士ハ皆其術ヲ不知。清正ノ築ケルハ大阪・尾州・肥後ノ熊本ナリ。清正ノ石垣ハ石ノ中ニトタンヲ入レテ石ヲツナグト云ヘリ。彼家ノ遺法今ニアルベシ。尋求ムベシ。畢竟ノ處ハ石壠ヲヒツ起セバ皆崩ル、モノナリ。石壠ナシノ土居ニ竹ヲ植タルニシクハナシト云。」



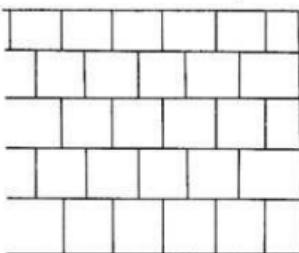
亀甲積之絵図



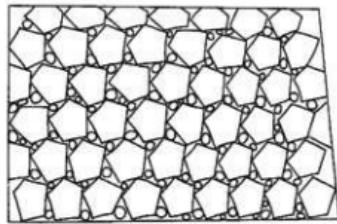
山目打込積之絵図



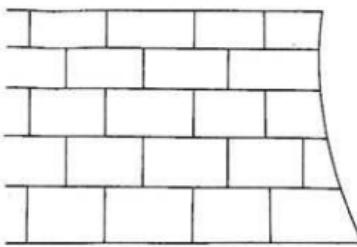
半鶴半切合積之絵図。但絵形ヨリ細クスル。



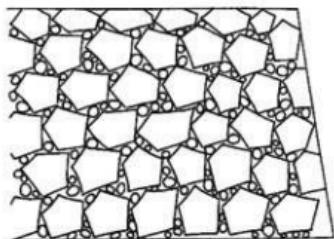
四方切合積之絵図 但荒クスレバ打込四方積と云



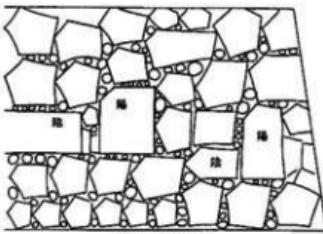
鶴目積之絵図又俵口積共



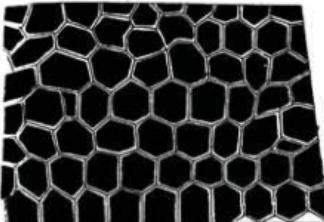
布築切合積之絵図



野面積之絵図



鏡積之絵図



曲尺場取残積之絵圖  
金

### 積方絵圖終

一、山目積を石づら出入を羽釣  
とり石を正ニ積を正打込積と  
名付。又石之取様正と少筋達  
と人交積候得者打込積と名付  
也。

一、布築至而荒ク羽場取丸鑿杯  
にて石づら平均積を打込布築  
積と名付。又石の合せ目長短、  
石の長サも長短有を布築崩と  
名付。切合にも打込にもする。

一、布築至而荒ク羽場取丸鑿杯  
にて石づら平均積を打込布築  
積と名付。又石の合せ目長短、  
石の長サも長短有を布築崩と  
名付。切合にも打込にもする。

一、布築至而荒ク羽場取丸鑿杯  
にて石づら平均積を打込布築  
積と名付。又石の合せ目長短、  
石の長サも長短有を布築崩と  
名付。切合にも打込にもする。

一、かねば残積尤切合也。勢ヒ有積かたなれ共所次第、大坂杯にて  
八塙下等ニ専用ルよし也。  
一、胴切合尤切合也。大事之所に可用積方也。胴口共に切合候故悉ク  
強積方也。荒クしても右胴切合の心得を以積立候得者同様也。是を  
打胴口合積と云。隨取候得共至而大事之所或ハ機台杯に専用る。  
又胴合せ石垣共云。

一、亀甲ハ七五三の積方也。鶴は千年亀ハ万年の寿ヲ取て目出度積方、  
國主御長久奉祝て名付たる也。亀甲鶴目升形積候口積何茂宝葉の積  
方也。

一、亂切合ハ石を豎横さま／＼に切合積をらん切合と名付。城中に此

通也。御乗屋下石垣鶴目積共鶴共名付  
一、半鶴積茂絵形よりハ少細ク築べし。崩丁場五十間御長屋下石垣之  
通也。御乗屋下石垣鶴目積共鶴共名付  
一、四方積切合を至而荒クすれば打込四方積と名付。是茂石の寸尺不  
極積を打込四方積崩と名付。四方積ハ地形の積方中央積升榮の積方  
と名付ル也。

石江子ギリを入積候由、本文ハ要之所々へハ入申事。普請ハ是程に  
利をつくし築事肝要ニ候。加藤清正ハ石垣を築事名人と言伝。大坂  
御城杯ハ専石之築方与相見ヘ候。太閤秀吉公被仰付候石垣なれば左  
如何ニも堅固ニ可築事。左候得バ大地裏有之候ても崩損シ申儀無  
もあるべき事候。石垣杯も格別のよしに候。誠に石垣は城の柱なれば

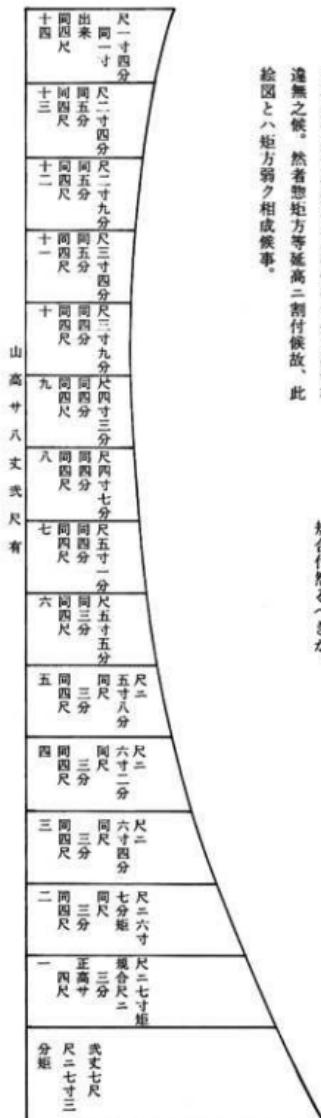
## 山の高さ等規合図

山・高サ材木高サ等引跡八丈武尺、但下繩迄  
勾倍尺ニ七寸三分、惣矩方五丈九尺八寸六分。

此矩四ツ割一ト分丈四尺九寸六分規合とす。  
但此矩方規合絵図ハ正高サノ絵図也。此通二  
而致出来候得者高サ正高サニ相成候故、延  
だけ石垣卓ク相成候。依而此絵図ヲ根本手本  
ニシテ延高サ之絵図を以集候得者全ク高サ相  
違無之候。然者惣矩方等延高ニ割付候故、此

絵図とハ矩方弱ク相成候事。

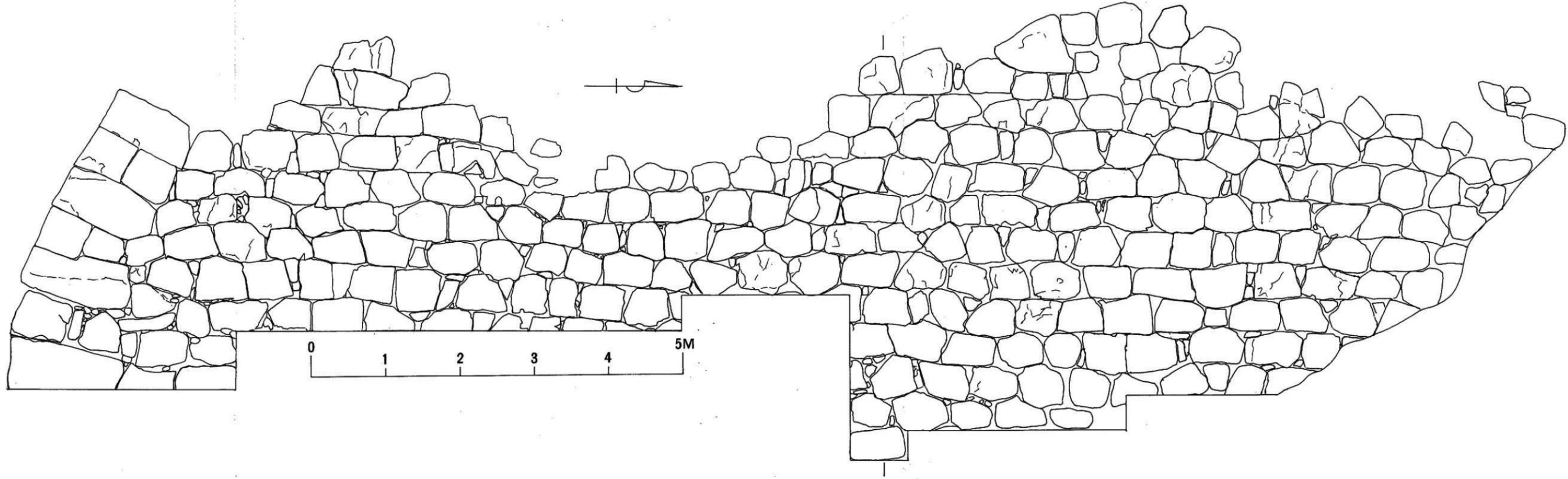
△此二枚之絵図ハ手本也。規合ハ五六尺  
強ク候。只是ハ手本と心得べし。高石  
垣規合強キハ不宜候。法ハ法ニアラズ  
と云事も有之。法ヲくづし申事も有之  
候。規合ハ大概八尺五寸中程より上り  
規合付然るべきか。



規合 1 5 14 迄<sup>メ</sup> 1 尺 6 寸 8 分  
同 2 5 14 迄<sup>メ</sup> 1 尺 5 寸 6 分  
3 5 14 迄<sup>メ</sup> 1 尺 4 寸 4 分  
4 5 14 迄<sup>メ</sup> 1 尺 3 寸 2 分  
5 5 14 迄<sup>メ</sup> 1 尺 3 寸 3 分  
6 5 14 迄<sup>メ</sup> 1 尺 2 寸 3 分  
7 5 14 迄<sup>メ</sup> 1 尺 8 分  
8 5 14 迄<sup>メ</sup> 1 尺 2 寸 9 分  
9 5 14 迄<sup>メ</sup> 1 尺 1 寸 2 分  
10 5 14 迄<sup>メ</sup> 8 寸 4 分  
11 5 14 迄<sup>メ</sup> 8 寸 5 分  
12 5 14 迄<sup>メ</sup> 6 寸  
13 5 14 迄<sup>メ</sup> 4 寸 5 分  
14<sup>メ</sup> 4 寸 来  
惣<sup>メ</sup> 1 尺 4 尺 6 寸  
(朱筆)

「規合 3 寸余算用達有之上規  
合すき候得共延高サノ絵形之  
根ニ調候故不致吟味候事。」

天守東側石垣平面図



# 天守東側断面図

A



# 掛川城歴代城主

城主名	種類	居城年	西暦	年齢	前任地	転封地	備
1 鮎見守	同	元和年中~	1420頃	50			中国に居城を越て城山に巣を置く。
2 同 因幡守		応仁頃	1465頃	50			北畠昌の廢帝城に移る。
3 同 因幡守水争							今川義忠の治により城地、氏郷重綱が父泰以相手す。
4 制比奈傳中守泰忠	同	3千石	文明初年	1472	40		
5 同 備中守泰則	同	2万6千石	永正3年	1512	45		
6 同 備中守泰則	同	2万6千石	弘治3年	1557	12		
7 潤井左衛門尉							
8 石川日向守成	同	8千石	永禄12年	1569	15	三河	家康株本
9 同 大門守通	同	6万石	天正18年	1584	11	近江安堵	小田原役候家康 豊臣源氏の治により城地、氏郷重綱が父泰以相手す。
10 山内馬守一景			1590	0			
11 内藤三郎守信成		3万石	慶長6年	1601	6	下総小南	今川氏真と共に小田原に転退す。
12 松平良長							
13 同 守内守守行	同	2万8千石	慶長12年	1607	9	遠江掛川賀	5月6日受け取り22日忘年祭す。
14 安藤守利貞							
15 松平守中守定綱	同	3万石	元和2年	1616	3	下總川山	家康株本
16 中野英徳守民			9年	1623	4	江戸在勤	豊臣源氏の治により城地、氏郷重綱が父泰以相手す。
17 藤原金秀守正	同	2万6千石	寛永2年	1625	7		一貫、山内守守行。
18 萩山大輔守朝幸		2万6千石	寛永9年	1632	1		朝暮、家康親兄弟。
19 松平大輔守忠重		4万石	寛永10年	1633	2	下総掛川	同、桑名守源。
20 松平守忠昌							松平守忠昌守名。
21 同 旗山守忠昌	同	7万石	寛永16年	1639	0	駿河田中	松平守忠昌守名。
22 木多裕登守忠義		3万石	正保元年	1644	5	駿河田中	朝暮、伊豆守源。
23 佐久間守忠昌		3万石	正保元年	1644	4	丹波守山	朝暮、伊豆守源。
24 長谷山守忠昌							朝暮守忠昌守名。
25 宮崎三郎守信長							朝暮守忠昌守名。
26 木多守中守利長							朝暮守忠昌守名。
27 同 伊兵衛少輔直好							朝暮守忠昌守名。
28 同 伯耆守直好	同	3万5千石外1万石	万治2年	1659	13	三河西尾	幼少につき毎日転封。
29 同 兵部少輔直好	同	1万石	寛文12年	1672	22		
30 志摩三郎守直好	同	1万石	元禄7年	1684	11		
31 佐平清長門			元禄2年	1685	0		
32 小笠原守忠興		4万石	元禄6年	1686	5	伊豫蟹山	元任守將。
33 同 山城守長興	同	6万石	正徳元年	1711	28	江戸在勤	栗原守忠興の治により城地、中島代官、本城を置る。
34 同 敦守長忠			元文4年	1719	5		御用守。
35 木田清守貞徳		5万石	延享3年	1746	16	上野船越	栗原守忠興の治により城地、中島代官、本城を置る。
36 同 備中守貞徳	同		宝曆13年	1763	42		御用守。
37 同 折橋守貞徳	同		文化2年	1805	3		御用守。
38 同 備守貞徳	同		文化7年	1808	2		御用守正徳、老中職再起。
39 同 備守貞徳	同		文化12年	1813	31		御用守寺事行を務む。
40 同 折橋守貞徳	同		天保12年	1841	21		
41 同 備守貞徳	同		文久2年	1862	6		
			上総芝山				

掛川城天守  
石垣調査報告書

発行者 昭和五十三年二月二十五日 印刷  
掛川市教育委員会 昭和五十三年三月三十一日 発行

印刷者 浜松市外東若林一六一  
中部印刷株式会社